庭園より眺める、新館と本館の融合と対話

新連載
第1回

美術館・博物館巡り

東京都庭園美術館

◎東京都港区

石渡慎一（東京会、久米設計）

時代とともに変遷する用途と空間

連載1回目にご紹介する東京都庭園美術館は、港区白金台の旧白金御領地に位置し、隣接の国立自然教育園と一体となって都心に貴重な緑を提供している環境の中にあります。本館は昭和8年（1933）に朝香宮邸として建設されたアール・デコ様式の住宅建築であり、アンリ・ラパン、ルネ・ラリックといった当時のフランスの一流芸術家たちと宮内省内匠寮が手がけた日欧融合の建築でした。先のオリンピックに合わせて昭和38年に、民間により本館に隣接して迎賓館（旧新館）が建てられ、外務大臣公邸、総理大臣公邸、迎賓館と、その建

ルネ・ラリックのガラス扉に彩られた本館大広間

庭園を最大限取り込んだ新館ロビー

物用途は時代と共に変遷してきました。昭和56年に東京都が取得後、現在の美術館としての姿に至ります。主に本館のアール・デコ様式の意匠を活かした企画展が開催され、来館者に親しまれてきましたが、歴史的建造物である旧朝香宮邸の保存と建物の特性を活かした美術館活動の実施を目的に、旧新館の老朽化に伴う建替え、併せて本館の改修、修復、復原、また庭園の整備を行うこととなりました。

豊かな環境が生んだ設計のハードル

都市計画公園内にある敷地、時代とともに変遷する建物の姿は、建築計画を進める上でさまざまな課題として現れてきました。まず、都指定の有形文化財の本館への既存遡及を避けるため、法3条の建築基準法適用除外を受け、文化財を保全する上での障壁をクリアしました。新館は本館の従属的な施設として床面積は本館同等以下とする制約を受け、また本館と新館をつなげる連絡通路は外廊下となり、延焼を避けるため10mの離隔距離を取りました。

また、隣接する白金自然教育園の地下水脈を阻害しないよう、新館は旧新館の基礎範囲と地下躯体の筐体の中に直接基礎で納めるために荷重制限を受け、都市計画公園による構造規定と合わせてS造とALC外装を基本とする軽い躯体としました。さらに、新館は本館の高さである14m以下とすること、既存本館等との複合日影により全体のボリュームが決まるといった具合です。

本館を補完する新館

新館には管理諸室と共に、二つの性格の異なるギャラリーが納まっています。ギャラリー1は構造体でもある半円のPC床版に照明を組み込んだ連続ボールトの天井。ギャラリー2は高さ9mのハイサイドライトから自然光が入る展示室とし、昼光利用を前提としたさまざまな演出ができる多機能の空間としました。

展示室前のロビーにはショップ、カフェを併設、庭園の景観を享受できるよう、PC版に直接はめ込んだサッシュレスの全面ガラスの開口です。

本館からのアプローチには、本館のルネ・ラリックのガラス扉と対話するように、ディンプル状の装飾ガラススクリーンを設け、二つの時代の往来を現代のガラスアートでつないでいます。

大判タイルによるモノリシックな塊としての外観、素材や表現を抑えた内観により、新旧の融合と対話がなされています。

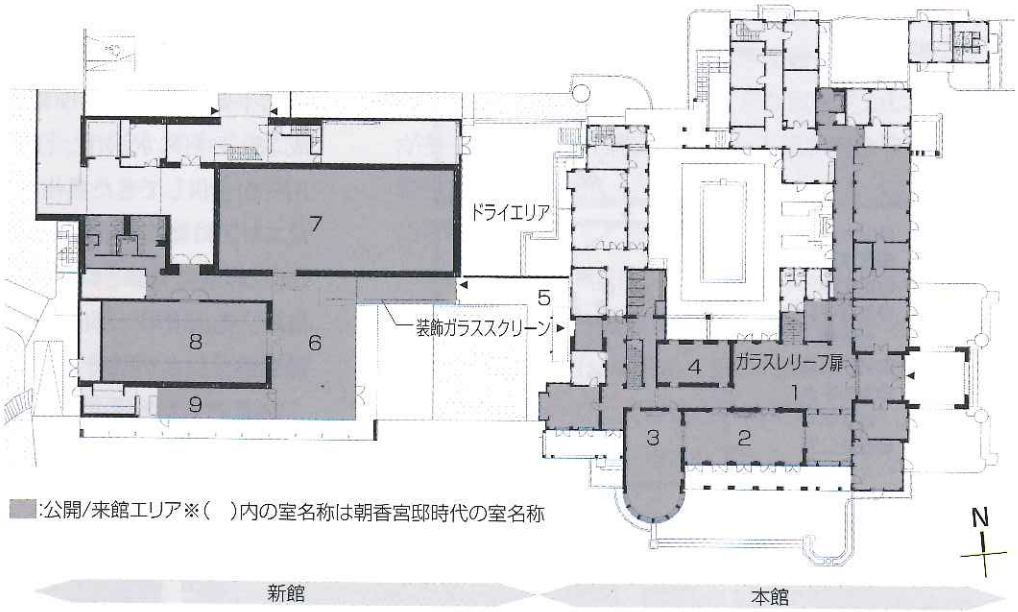
PCボールト天井によるギャラリー1

過去と現代をつなぐ装飾ガラススクリーン

ルネ・ラリックのガラス扉

ディンプル状に落ちる影

1. 第1展示室（大広間）
2. 第2展示室（大客室）
3. 第3展示室（大食堂）
4. 第4展示室（喫煙室）
5. 連絡通路
6. ロビー
7. ギャラリー1
8. ギャラリー2
9. カフェ



:公開/来館エリア※（　）内の室名称は朝香宮邸時代の室名称

1階平面図 S=1:800

所 在 地：東京都港区白金台
主な用途：美術館
敷地面積：34,765.02㎡
建築面積：1,048.29㎡（本館）
1,298.26㎡（新館）
延床面積：2,100.47㎡（本館）
2,140.81㎡（新館）
構造・規模：RC造
地上3階・地下1階（本館）
S造一部RC造
地上2階・地下1階（新館）
設計：株式会社久米設計
（安東　直、前田芳伸、川東智暢）

本館のデザインを特徴づける開口のプロポーションを新館に踏襲し、庭園に向けて共存する本館と新館

連載
第2回

美術館・博物館巡り

早稲田大学坪内博士記念演劇博物館

◎東京都新宿区

宇塚幸生（東京会、入江三宅設計事務所）

英国の「フォーチュン座」を模して今井兼次によって設計された

全世界は劇場なり

建築学科出身のOB仲間が集まってそれぞれ母校の自慢できる建物を案内し、お昼は学食でという会合を繰り返しているグループがある。私がその会に入るなら新宿区早稲田のキャンパスで是非この演劇博物館、通称「演博」を案内したいものだ。

舞台部分天井と切穴

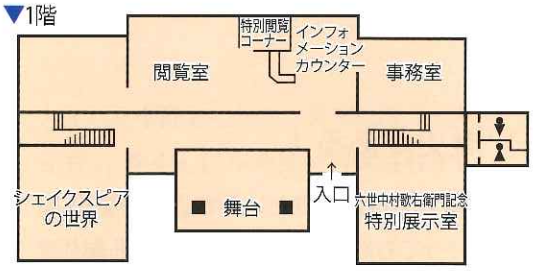
この建物は昭和3年（1928）に坪内逍遥の古希（70歳）と『シェークスピア全集』全40巻の翻訳完成を機に建てられたもので、設計は今井兼次（1895-1987）である。建物自体が英国のシェークスピア劇場を参考にした鉄筋コンクリートの建物であり、随時演劇に関するテーマ展を企画しているユニークな博物館である。

舞台上には「「Totus Mundus Agit Histrionem」の文字

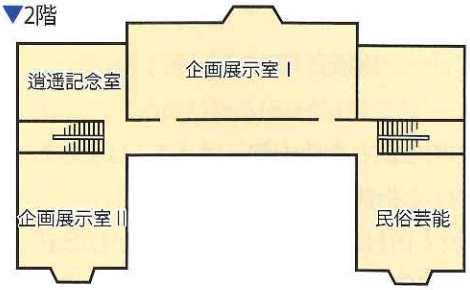
「演博」の建物

建物はシェークスピア劇場のフォーチュン座を再現し、1階は舞台、両翼の棟が桟敷席とされ、前庭が一般席という見立てとなっている。舞台屋根はイオニア式柱頭に支えられ、中央にシャンデリア、背後にバルコニーが設けられている。天井上部には切穴が設けられており、当時の文献より「天」（ヘブン）からの演出に使われたものを忠実に再現している。この舞台では昭和22年(1947)に前進座によって「ベニスの商人」が上演されたと記録にあり、その後も公演が行われているという。

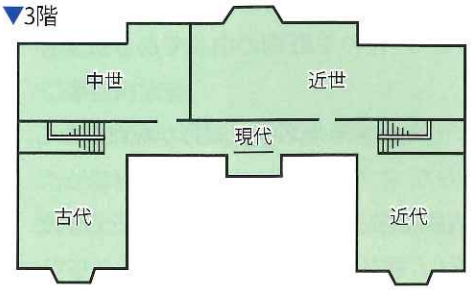
▼1階



▼2階



▼3階



所在地：東京都新宿区西早稲田　規模：地上3階・地下1階
竣　工：昭和3年（1928）　構造：RC造
建築面積：約400㎡　設計：今井兼次

内部に入ると1階には図書閲覧室とシェークスピアの資料、きしんだ階段を上がった2階には企画展示と民俗芸能、そして3階は日本の演劇の時代別展示と整理されている。3階には塔屋に上がるきれいな鉄骨螺旋階段があり、入学式など重要な行事の際にはこれを使って塔の上に旗が掲げられる。

展示内容

展示物は演劇の歴史・資料・衣装・面など多岐にわたるが、私のお勧めは「シェークスピア劇場」と「旧帝国劇場」の模型である。前者はこの建物の基になっていたものでエリザベス様式の木骨構造がよく表されている。後者の旧帝国劇場（1911年竣工）は大正時代に「今日は三越、明日は帝劇」の語源となった、皇居の内堀沿いに戦前建っていた洋風劇場である。内部は全て椅子席で、貴賓席もありながら花道などの伝統要素も備えていたという建物であり、当時の威容が感じられる精巧な模型となっている。

「演博」の思い出

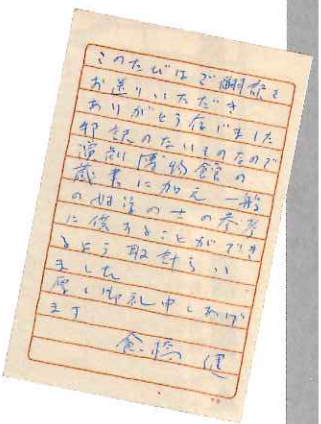
学生時代、建築学科池原研究室にてS.ティドワースの『劇場―建築・文化史』という本を翻訳する機会に恵まれた。完訳記念に分厚い訳書を持ってこの演劇博物館に届けようと計画を立てた。理工学部から本部キャンパスまでは歩いて20分程度、一学生の唐突な申し出にも館員は快く対応してくださり、後日館長（倉橋健早稲田大学名誉教授（1919-2000））より丁重な礼状をいただいた。終わりにこれを紹介する。拙稿がこの資料室の一画に保管されていることを思うと、この建物への愛着もひとしおである（なお、『劇場―建築・文化史』の原稿は文化庁委託研究としてまとめられ、その後早稲田大学出版部より出版された）。

ちなみに冒頭の「全世界は劇場なり」とはこの建物の舞台上に掲げられたラテン語「Totus Mundus Agit Histrionem」の訳である。建築設計の世界に入ったのもこんな小さなきっかけだったのかも知れない。

開館式の様子（パンフレットより抜粋）

英文パンフレット

S.ティドワース『劇場』訳書


倉橋健館長からの手紙

アイレベルから見たホキ美術館の全景

連載
第3回

美術館・博物館巡り

ホキ美術館

◎千葉市緑区

山梨知彦（東京会、日建設計）

写実絵画専門の美術

ホキ美術館は、日本初の写実絵画専用の美術館です。千葉県の土気、昭和の森への景観が楽しめる場所に平成22年（2010）に建設されました。

展示されている絵画は、写実の中でも「細密画」と称されるもので、大判の画布の上に写真と見違えるほどに細密に描かれたものです。葡萄やパンなどの静物から、人体や裸婦、そして風景といったあらゆるジャンルの対象物が、それこそ手を伸ばせば触れることができそうなほどに、リアルに描かれているのです。この美術館の設計にあたっては、この特徴的なコレクションが最大限魅力的に見えるように、細心の注意を払いました。

シームレスな展示空間

展示する絵画が、繊細かつ精密に描写された写実物となると、通常の美術館の中で当たり前のように存在しているモノやディテールが気になり始めました。例えば絵画を展示するためのピクチュアレールやワイヤの存在が気になるわけです。また絵画を照明するために当たり前のように天井から吊り下げられた照明器具の存在が、さらには壁クロスの継ぎ目までが、写実画のデリケートな表現を傷めるように思われました。

理想となるのは、柔らかい光に包まれた、白く継ぎ目一つない抽象的な空間の中に、極めて具象的に描かれた絵画が浮かぶように据えられている状態ですが、実現は至難の業です。というのも、建築は部材と部材の組み合わせでつくられるため、部材の継ぎ目である目地が必ず現れてくるのです。どうしたら目地が消せるであろうか？　考えた末にたどり着いたのは、船のように鉄板を使い、すべての継ぎ目を溶接して、ひとつながりの空間をつくることでした。鉄板を使うことで、マグネットを使って絵画を壁に固定することができ、ピクチュアレールや絵画を吊るすワイヤの存在も消せそうです。こんな具合に、少々強引にも思える鉄板を使った美術館計画が始まりました。

鉄板構造を使い回す

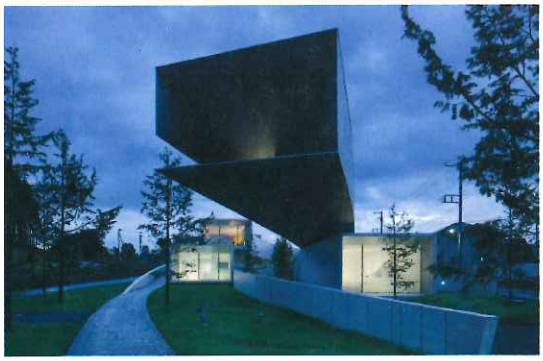
このように具合が良い鉄板構造なのですが、通常の構造体に比べ3倍ほどの値段になってしまいました。最初は途方に暮れていたのですが、考えてみれば、絵画をマグネットで鉄板に張り付けるためには、内装を行わないで内部空間に構造を露出させる必要があることを思い出しました。この建物には、原則として内装工事は不要で、鉄板でできた船のような構造体にペンキを塗ればよかったのです。外装も、構造体の鉄板を露出させてしまえば、ペンキを塗るだけで完成です。構造体だけで全体工事費の75%を占めていたのですが、構造体が内装にも外装にもなっていることで、構造体以外の工事が大幅に減少し、目標予算の中で収まることがわかりました。さらに鉄板でできた構造体を空調のダクトとしても、LED照明のケースとしても兼用したため、コストのさらなる削減と同時に、空調の吹き出しや照明器具が建築の中へと統合され存在感が消えて、結果として美術館を理想的な方向で実現することができるようになりました。

外観にも表れる

こうして実現した絵画ギャラリーを積み上げることで、言い換えれば、写実絵画専用美術館に必要な展示空間だけで、この美術館の外観は構成されています。

円弧状の展示空間を積み上げると、2点で重なり合って積み重なるわけなのですが、展示空間の長さが約100 mであることを考えると、最も構造的な合理性が高い重ね方は、指示点が両端部から25 m入った時となります。両端に飛び出した25 mの跳ね出しと、中央の50mスパンの部分がやじろべえのようにバランスして、円弧の2点の指示点にかかる力が最小となるからです。ホキ美術館の特徴的な外観は、実は写実絵画のために最適な白い抽象的な空間を生み出すための工夫とつながっているわけです。

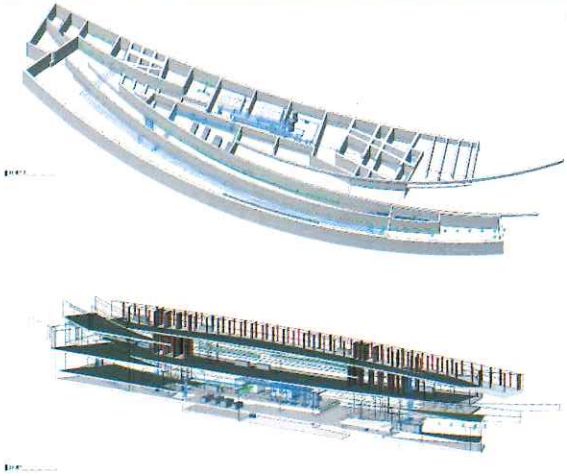
千葉県へお出かけの際はぜひお立ち寄りいただき、鉄板の構造体が生み出した、具象絵画のための展示空間を味わっていただければ幸いです。



夜景

上部から見ると、円弧状の展示空間が積み重なっている様子がわかる

展示空間内部の様子



ホキ美術館はBIMを用いて設計した最初期の仕事の一つである

■概要
所在地：千葉県千葉市緑区あすみが丘
主な用途：美術館
敷地面積：3,862.72㎡
建築面積：1,602.39㎡
延床面積：3,722.39㎡
構造・規模：S造、RC造、地上1階、地下2階
設計：日建設計／山梨知彦＋中本太郎＋鈴木隆＋矢野雅規